

郷土史への扉

今年^{※1}は、霧島神宮が正徳五（一七一五）年に現在の地に造営されてから三〇〇年を迎えます。そこで、前回から霧島神宮の歴史について紹介していきます。

今回は霧島神宮の創建から現在に至るまでの変遷について紹介します。

火山噴火と霧島神宮

霧島神宮は、昔は西御在所霧島権現社と称し、^{※2}別当寺は霧島山錫丈院華林寺と呼ばれていました。

造営二百年 霧島神宮 その①

^{※3}『薩藩旧記雑録』によると、第二十九代欽明天皇の時代（五四〇年）に、慶胤という僧が高千穂峰と御鉢との間に位置する背門丘に社殿を造営したのが初めてであると書かれています。ところが、延暦七（七八八）年七月の霧島山噴火によって社殿は消失し、その後、永い間そのままの状態になっ

ましたが、天慶三（九四〇）年に性空上人が霧島山に登り、高千穂峰西麓の高千穂河原の瀬多尾越（古宮址）に社殿と別当寺の華林寺を再興しました。霧島神宮は性空上人から第二十一代住職道恵に至るまでの約二九〇年間は天台宗の寺として存在しましたが、文暦元（一二三四）年の霧島山大噴火によって社殿や別当寺などは全て焼失しました。

その後、約二五〇年間は神社・寺院共に再興されず、霧島田口待世（霧島中学校隣接地）にご神体を移して仮宮を建てて祀りました。

この仮宮の時代は、鎌倉時代中期から南北朝時代を経て室町時代（戦国初期）の頃で、この間は、元寇や南北朝騒乱、応仁の乱など国の内外共に多難

な時代でした。南九州においても、地元の家族たちが南朝方と北朝方に分かれて戦い、これらの争乱に乗じて勢力争いが起こりました。霧島地域においても、地方豪族であった税所氏や島津氏もこの争乱に巻き込まれていきました。このような背景もあって霧島神宮の再興は困難だったと思われる。



最初に社殿が造られた背門丘



高千穂河原に残る古宮址



霧島神社社殿正面

霧島神宮の再興

霧島神宮は約二五〇年間、仮宮として田口待世にありましたが、文明十六（一四八四）年に第十一代島津忠昌公は、真言宗の僧兼慶に命じ、現在の場所に社殿と別当寺華林寺を再興させました。文明十六年といいますが、戦国時代の初期の頃にあたります。霧島付近では税所氏と島津氏が戦い、税所氏が敗れました。所領を得た島津氏は薩摩・大隅国の統一の望みを持ち、その願いが成就することを祈念して社殿の造営に着手したと考えられます。

正徳年間の再興

その後、霧島神宮は宝永二（一七〇五）年十二月に華林寺から出火し、社殿を含め全ての建物が焼失しました。そして、三〇〇年前の正徳五（一七

一五）年に第二十一代藩主島津吉貴公の寄進によって現在の社殿が建てられました。

社殿は地形の傾斜を生かして本殿・拜殿・登廊下・勅使殿などを一直線に配しており、見る方向によって社殿の景色が見事に移り変わる壮麗な美しさをつくり出しています。このように、霧島神宮は度重なる火山噴火や出火によって焼失しましたが、人々の深い信仰心と努力によって再興され現在に至っています。

（文責 鈴）

※1 明治七年に霧島神社が霧島神宮に改称された。
 ※2 ここでは神宮に統一した。
 ※3 鎌倉から明治時代までの島津家・薩摩藩の文書集。明治十三年完成。